

職員の皆さんへ

早くも6月を迎えました。

この時期は、あらゆる団体や組織の年次総会が開催されるシーズンであり、それぞれの担当部署におかれては、それらの対応に忙しいことと思います。私自身もそうした団体の代表を務めたり規約に基づいて総会の議長を務めたりしますが、ここで改めて思うことがあります。

通常そうした総会では、前年度の事業内容と決算の説明を行い監査報告を受け、承認を受けた後、新年度の事業内容と予算の審議を行う段取りになっています。よほどのことがない限り会議そのものはスムーズに進行され、いわゆる「シャンシャン会議」といわれるように「意義なし」の掛け声とともに幕を閉じる様子は皆さんもよく目にすることと思います。

一方で、私たちは計画や戦略を進めていく上で、「PDCAサイクル」というものを重要視しています。これは「Plan(計画)」「Do(行動)」「Check(検証)」「Action(実践)」という頭文字による計画の検証作業行程ですが、上記で述べたような慣例化された「シャンシャン」総会の審議では、前年度の事業内容について、詳しい検証や反省がなされていない場合がしばしば見受けられることもあるのです。

イベントを行った際に従事したスタッフや参加者(お客様)からの貴重なご意見や不満の声、または実際に直面した課題への解決策など、予算の数字合わせよりももっと深く鋭く検証していきながら、次年度以降にそれを活かしていく着眼点が不可欠ではないでしょうか。

今年に入ってから本市が長崎県と熊本県の関係自治体とともに取り組んできた「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録について、1月にイコモスから厳しい中間報告を受けたことから、2月にこれを取り下げ、3月までにイコモスによるアドバイザー契約を交わし修正作業が行われました。その結果、南島原市の日野江城跡と本市の田平天主堂が構成資産から除外されるというショッキングな結果になったことは皆さんもご承知の通りです。

イコモスによる中間報告の中には、キリスト教の伝来は世界各地で行われており、それぞれに伝播と繁栄、そして復活を象徴する教会堂建築は存在するので、日本独特の世界に誇る資産の普遍的価値は「禁教期」にスポットを当てるべきだという見解だったそうです。

そうであれば、当初から進めてきた「伝播と繁栄」「弾圧と潜伏」「復活」という三段階に及ぶストーリーそのものが否定されたということになり、初動の判断や作業に問題があったといわざるを得ません。5月29日に開催された首長会議後の報道陣からの問いかけに私が答えた「総括すべきだ」という言葉の意味はまさにそこにあるのです。

「伝播と繁栄」を示す日野江城跡と「復活」を示す田平天主堂をトカゲの尻尾きりみたいに簡単に除外することで登録実現を目指すというのは余りにも安直かつ軽率であるという指摘を避けられません。この際、「禁教期」と「集落」こそが世界遺産の価値として認められるのであれば、平戸市では当初より重要な文化的景観地域として指定作業に多くの住民の皆さんの理解を得て苦労を重ねてきた担当者の研究成果が積み上げられ、春日集落以外にも貴重な足跡をのこしてきた根獅子や飯良などの集落の価値が「建築物を重視する」という当初の考え方によって徐々に外されてきたのです。

そうした経緯や努力の蓄積を知っている私は、会議の席上、「この際、きちんとした総括をした上で、資産名も変えるべきだ。教会群という名前を削除し、集落群と改めてはどうか」という提案もさせて頂き、更に会議の後中村知事に対して今後の取り組みについて直接単独で強く要請を重ねた次第です。

平戸市にとって重要な世界遺産登録事業でもあり、また時期的に総会シーズンでもあることから、今回はこのことに絞って私自身の思いを述べさせていただきましたが、あらゆる事業はこうしたきめ細やかな検証の繰り返しによって、「前進」や「進化」が成し遂げられています。表面だけ取り繕ってもいつかその化粧は剥げ落ち、歴史に耐えられないものになります。

これは、私たちの日常業務も同じことがいえるのではないのでしょうか。その場をうまく取り繕い、ちょっとした障害を乗り越えた気分になっても、そのツケは後々さらに大きくなって降りかかってくることもあるのです。そして常に事業の本質を見抜き、その価値を確認しつつ物事の展開に応用できる柔軟性も持っていなければなりません。いわゆる「そもそも論」というものです。

「そもそもこの事業は何のために、誰のためにあるのか」という到達目標をしっかりと掲げ続けなければ、途中で主客転倒し、目的と手段が取り違えることもありうるのです。「ボタンの掛け違い」と指摘されないためにも、常に事業の理念や目標とすべき方向性を担当者全員で共有し、果敢に努力を惜しまない姿勢が強く求められます。

いずれにしても、平戸市内をはじめ県内各地に点在する宗教施設やその環境は先人によるいくつもの犠牲や敬虔な営みによって受け継がれてきた尊い財産があります。これらは世界遺産に登録されようがされまいが、私たち今に生きるものの当然の務めとして未来の世代に引きついでいかなければなりません。そうした意味で、日野江城跡はキリスト教史における時空を超えた壮大な物語の「プロローグ」として、田平天主堂は同じく「エピローグ」として位置づけ、県や包括的な保護施策を明確に位置づけてほしいということも申し入れをしたところです。

さて6月定例市議会は6日から開催される予定です。

補正予算の審議をはじめ市民生活にかかわりの深い施策など、その意義や必要性なども含めてしっかりと説明責任を果たすべく準備に力を注いでいただきたいと思います。議員各位から求められる検証にしっかりと答えられるよう、日頃の努力の成果を示しながら頑張っていきましょう。

平成 28 年 6 月 1 日

平戸市長 黒 田 成 彦